

仏説摩訶般若波羅蜜多心經

唐三藏法師玄奘訳

觀自在菩薩 行深般若波羅蜜多時

照見五蘊皆空 度一切苦厄

舍利子 色不異空 空不異色

色即是空 空即是色

受想行識 亦復如是

舍利子 是諸法空相

不生不滅 不垢不淨 不增不減

是故空中 無色無受想行識

無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法

無眼界 乃至無意識界

無無明 亦無無明尽

乃至無老死 亦無老死尽

無苦集滅道 無智亦無得 以無所得故

菩提薩埵 依般若波羅蜜多故

心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖

遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃

三世諸佛 依般若波羅蜜多故

得阿耨多羅三藐三菩提

故知般若波羅蜜多

是大神呪 是大明呪

是無上呪 是無等等呪

能除一切苦 真實不虛

故説般若波羅蜜多呪

即説呪曰

羯帝 羯帝 波羅羯帝 波羅羯帝

菩提僧莎訶

般若心經

偉大にして深妙なる智慧の実踐行について、その最も肝要なる教えを仏が説ける聖典

観自在すなわち観音菩薩が、深き智慧の実踐行を行じておられたときに、人間の構成要素としての五種のもものは、すべて実体なきものであることを実感して、すべての苦しみという災いから救ったのである。

舍利子よ。形があるということは実体がないということと同じであり、実体がないということは形があるということと同じなのである。すなわち、形があるからこそ、実体がないということになり、実体がないからこそ、形がある、ということになるのだ。他の四つの心の働きである、感覚、記憶、意志、知識も、形あるものの場合とまったく同じことが言えるのだ。

舍利子よ。これこそが、この世のあらゆる存在や現象には実体がない、という姿なのである。

したがって、それらは本来生じたのでも滅したのでもないし、よこれたものでも淨らかなものでもないし、増えたものでも減ったものでもないのである。

したがって、実体がないということの中には、形あるものではなく、感覚、記憶、意志、知識といった精神作用もないし、眼・耳・鼻・舌・身体・心といった六つの感覚器官もない。

さらに、形・音・香・味・接触感・心の対象、といった、それぞれの感覚器官の対象もないし、それらを受けとめる、眼識から意識までの六つの心の働きもないのである。

さらに、無知もないし無知が尽きることもない、ということからはじまって、老も死もなく、老と死が尽きることもない、ということになる。

苦しみもその原因も、それをなくすことも、そして、その方法もない。もともと得るものがないのだから、智も得もないことになる。

かくて悟りを求める者たちは、智慧の完成という実践行に従っているので、心には何のさまたげもなく、さまたげがないから恐れがなく、すべてのあやまった考え方から遠く離れているので、最後には永遠にしてしずかな境地に到達することになる。

過去・現在・未来の仏たちは、智慧の完成を実践するので、この上なき最高の悟りを得ることができるのである。

したがって、智慧の完成という実践行こそが、

偉大なる真言であり、

悟りのための真言であり、

最高の真言であり、

比べるべきものなき真言であり、

これこそがあらゆる苦しみを除き、

真実にして虚妄ではないものだ、

ということがわかるのである。

さてそこで、智慧の完成の真言を最後に出しておくことにしよう。

すなわち、その真言とは、次のようなものである。

“往き 往きて

彼岸に往き

完全に彼岸に到着したものを

さとりそのものである

めでたし”

「智慧の完成についての最も肝要な教えを説きし聖典」

第一回 漢訳者 三蔵法師玄奘

僧・玄奘三蔵は、唐の時代、印度から膨大な経典を持ち帰り、それを中国語に翻訳しました。「三蔵法師」とは、〃仏教の聖典について、よく精通している偉い方〃を意味します。では、〃お経〃とは、どのようなものなのでしょうか。

○ 二六二文字の『般若心経』

○ 三蔵法師と『西遊記』

○ 〃お経〃には三つの種類がある……「三蔵経〃法」

一 経蔵…釈迦が説いた教え

二 律蔵…守らなければならない戒律………

三 論蔵…釈迦の教えに対する解釈、注釈

〃八万四千の法門〃

[五 戒]

1. 不殺生戒(ふせつしょうかい)
2. 不邪淫戒(ふじゃいんかい)
3. 不偷盜戒(ふちゆうとうかい)
4. 不妄語戒(ふもうごかい)
5. 不飲酒戒(ふおんじゅかい)

○ 三蔵法師の翻訳事業……「訳経院」七十五部千三百三十巻

○ 最も膨大な『大般若経』(六百巻)のエッセンスが『般若心経』

第二回 経題について

「仏説魔訶般若波羅蜜多心経」という題目の一つ一つの言葉は、深い意味をもっています。そして、この題そのものの中に、経典全体の内容が見事に示されているのです。

○ 「説」「心」「経」以外は、全部サンスクリット語の音写文字

○ 「仏」は「ブツダ」〃正しく悟った者、正覚者

南方仏教(ベトナムを除く)では、歴史的人物としての釈迦のみ
大乘仏教では、いろいろな仏がいる。

○ 釈迦の弟子たち五百人(五百羅漢・代表者が「十大弟子」)による経典編纂事業

〃釈迦は一冊の経典も書いていない。

○ 「魔訶」は「マカ」〃大きい、非常に意味が深い、底が深い

○ 「波羅蜜多」は「パーラム・イタ」〃あちら側の岸に行った

※ 〃お彼岸〃は、本来、「六波羅蜜」〃此岸しがんから彼岸へ渡るための六つの実践行を行う期間だった。

○ 「般若」は、「ブラジュニヤ」〃正しい智慧、真実を見抜く洞察力……〃般若の面〃は？

第三回

観自在菩薩

『般若心経』は、釈迦が「観自在菩薩」について、舍利子に対して説かれた教え、という形になっています。では、「観自在菩薩」とは、どのような存在なのでしょうか。

○ 「観自在菩薩」「観世音菩薩」「観音菩薩」は同じ

→ 世の中の人々の苦しみの声を聞いて、自由自在に救ってくれる菩薩

○ 様々な菩薩像

千眼千手観音・十一面観音・馬頭観音などの持つ意味

○ 「観音」は「慈悲」の象徴。「智慧」と並ぶ仏の徳性の一つ……三尊仏

慈：与楽 悲：拔苦

○ 地藏菩薩は、脇侍とならず独立……六地藏・一体のもの

○ 「菩薩」には三つの意味 一 釈迦が悟る前の段階

二 悟りを目指している者の代表

三 仏教徒全体

[釈迦三尊]

文殊菩薩
釈迦牟尼仏
普賢菩薩

[阿弥陀三尊]

観音菩薩
阿弥陀仏
勢至菩薩

[薬師三尊]

日光菩薩
薬師如来
月光菩薩

第四回

六つの実践行・般若波羅蜜多

「行深般若波羅蜜多時」「波羅蜜多」(パーラム・イタ)は「彼岸＝悟りの世界」に到達するためにやらなければならない実践行のことです。観自在菩薩は、深き智慧の実践行を行じておられたのです。

○ 六つの実践行・六波羅蜜(ろくはらみつ・ろつばらみつ)

一 布施波羅蜜(ふせはらみつ)……他人に対して広く施しをする実践……「法施」と「財施」

二 持戒波羅蜜(じかいはらみつ)……日常生活の諸規則を守る実践……「五戒」

三 忍辱波羅蜜(にんにくはらみつ)……じつと我慢する実践

四 精進波羅蜜(しょうじんはらみつ)……あらゆる努力を惜しまない実践

五 禪定波羅蜜(ぜんじょうはらみつ)……現在していることに心を集中させる実践

六 般若波羅蜜(はんじゃはらみつ)……自分本来の姿に目覚める智慧を理解し実践する

右の五つの実践を支える

○ 「布施」には「無財の七施」があり、中でも「言施(ごんせ)」は、だれでもすぐ実行できる実践

第五回

存在するものの五つの構成要素・五蘊

「照見五蘊皆空 度一切苦厄」 観音様は、人間の構成要素である五つのすべては「空」である、と見抜きました。そのことによつて、一切の苦しみや災いから救つたのです。

○ 「十干十二支」……中国の世界観・宇宙論

十干……木火土金水（五行）×兄弟えとⅡ甲乙丙丁戊己庚辛壬癸

十二支……子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥

○ 仏教には「四大（しだい）」と言われる元素説があるが、精神的要素が入っていない。

「地」…固体部分／「水」…水分／「火」…熱／「風」…呼吸

○ 「五蘊（五陰）おん」は、精神的要素を中心として、人間の構成要素を考えたもの

「肉体」…「色」…形あるものすべて

「受」…感覚・感受性

「想」…記憶・想念

「行」…意志・行動力

「識」…意識・知識

「精神」…

第六回

釈迦の十大弟子の一人・舍利弗

『般若心経』に二度出てくる舍利子（Ⅱ舍利弗）は、釈迦の十大弟子の一人。智慧の教えであるこのお経を、最も智慧の優れた舍利弗に説いたのです。

○ 経典の初めの方には必ず弟子の名前が出てくる。

○ 釈迦の母・摩耶夫人、妻・耶輸陀羅、子・羅睺羅

○ 目連（目犍連）が母を救つた物語↓「お盆」の起源

・母は、「餓鬼道」で「ウランバナⅡ倒懸」の状態↓「盂蘭盆」

・釈迦に「自業自得」といわれ、修行に励む。

↳「自業自得」には「善因善果」と「悪因悪果」がある。

・「安吾あんご」の明けた七月十五日、救われた母を見る↓「盆踊り」

○ 舍利弗は、十大弟子の中で、智慧第一の人

（「仏舍利」「舍利塔」の舍利は「シャリーラⅡ人間の骨」の音写）

【釈迦の十大弟子】

須菩提	解空第一
優波離	持律第一
舍利弗	智慧第一
摩訶迦葉	頭陀第一
阿那律	天眼第一
目犍連	神通第一
阿難陀	多聞第一
羅睺羅	密行第一
迦旃延	論議第一
富楼那	說法第一

第七回

「空」とは何か

「色不異空 空不異色 色即是空 空即是色」「空」とは、有るようで無い、無いようで有る。こと……仏教の最も基本になる思想の一つです。

- かつては、「無我」と訳されていた。
- B.C.六世紀頃、バラモン教にあった「梵我一如(ほんがいちによ)」という思想これに対して、釈迦が「無我」を説く。
- 昨日の「私」は、今日の「私」ではない……「私」などという実体は本来有り得ない……「空」
↳では、過去の「私」とは？ 未来の「私」はどこへ行くのか？
- 進歩・成長・発展は、即老化
 - ・ 一休禅師(元日は 冥途の旅の一里塚 めでたくもあり めでたくもなし)
- 「無常」……死ぬ人がいるから生まれる……肯定的な面も含んだ思想
- 禅宗系の宗派でよく使われる二つの物語

第八回

ものの実体とは——六不

「受想行識 亦復如是 是諸法空相」「色」以外の人間の構成要素についても、すべて「空」なのです。そのことを更に別の言葉で言ったのが「不生不滅 不垢不淨 不増不減」です。つまり、あらゆる存在・現象には実体というものはない、という思想です。

- 「エネルギー不変の法則」と六つの「不」
- 〈起きて半畳 寝て一畳〉(人はパンのみにて生くるにあらず……)「空」に通ずる。
- すべては、相対的、現象的な姿にしか過ぎない。
 - ・ 『方丈記』〈ゆく川の流れば絶えずして しかも もとの水にあらず
淀みに浮かぶうたかたは かつ消えかつ結びて 久しくとどまりたるためしなし〉
- 【問題】死んで浄土、極楽へ行く……誰が行くのか？
- 「一期一会」「一所懸命」
 - ・ 坂村真民〈二度とない人生だから 一輪の花にも 無限の愛をそそいでゆこう……〉

(詩集『念ずれば花ひらく』より)

第九回

生死の世界・六道輪廻

「衆生」、つまり、一切の生き物が生まれかわり死にかわる六つの世界が「六道輪廻」です。それは迷いの世界であり、そこから抜け出して「解脱」して、悟りの世界へ到達する努力が実践行・波羅蜜多なのです。

○ 「六道(ろくどう・りくどう)」は、仏教における一つの世界観・宇宙論

一 地獄道

二 餓鬼道

三 畜生道

四 阿修羅道(修羅道)

五 人間道

六 天道

↳過去↓現在↓未来と、衆生は永遠に転生を繰り返す……「六道輪廻」「輪廻転生」

○ 六道はすべて「迷い」の世界。それを超えた世界が「仏の世界」「悟りの世界」

○ 仏教のもう一つの宇宙論……「三千大千世界」

↳小釈迦千体・中釈迦千体・宇宙の中心に摩訶毘盧遮那仏まかびるしやなぶつ||東大寺の大仏

第十回

感覚的・知覚的世界——十八界

「無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界乃至無意識界」 人間の感覚的・知覚的世界を分析した十八の世界、そのすべてが「無」である、と説きます。

○ 「六根」

〈人間の六つの感覚器官〉

眼……………色(形あるもの)

耳……………声(あらゆる音)

鼻……………香(匂い)

舌……………味

身(皮膚)……………触

意(心)……………法(心の対象・無限大)

「六境」

〈感覚の対象〉

眼識界

耳識界

鼻識界

舌識界

身識界

意識界

「六識」

〈そうしようとする気〉

○ すべて、主観的な「私」を中心とした世界||相対的な世界||「差別」の世界||「迷い」の世界

○ 「無」で否定して、「真実」の世界へ

第十二回 十二の因縁

「無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽」「無明」から始まって「老死」で終る「十二因縁」は、「輪廻転生」の原因と結果を追求した、仏教の基本的な教義ですが、それすらも「無」である、と否定するのです。

○ 「因」は直接の原因、「縁」は間接の原因・与えられた条件。「因縁生起(略して縁起)」

○ 「自業自得(善因善果・悪因悪果)」の「業」には、「身業」「口業」「意業」がある。

過去世・現在世・未来世のすべてに、その原因↓結果があらわれる……「十二因縁(縁起)」

- [十二因縁]
- | | |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 一 無明(むみょう)……………無知であること | 七 受(じゅ)……………苦楽を識別する |
| 二 行(ぎょう)……………宿りたいという願い | 八 愛(あい)……………好きなものだけを
受け入れようとする |
| 三 識(しき)……………母親の胎内に宿る | 九 取(しゅ)……………自分のものになりたい |
| 四 名色(みょうしき)……………身体と心ができてくる | 十 有(う)……………生存したいという欲望 |
| 五 六入(ろくにゅう)……………六根がそなわる | 十一 生(しょう)……………生まれる |
| 六 触(そく)……………外に出て触れる | 十二 老死(ろうし)……………年老いて死んでいく |

第十二回 四つの苦しみ・四苦

「苦集滅道」は四つの真理をあらわしています。今回と次回はその中の「苦」について考えます。特に「死」は、私たちにとつて、最も切実な問題です。

○ 「四苦」……「生老病死(しょうろうびじょうし)」

○ 釈迦は、なぜ「苦」を四つにまとめたのか?……母・摩耶夫人の死が根本的な原因となる。

釈迦の「四門出遊(しもんしゅつゆう)」の物語

- ・ 一日目、老人に出会う。二日目、病人に出会う。三日目、葬列に出会う。
- ・ 四日目、一人の修行者に出会う。さて、その人は……

○ 「生老病死」は一連の流れ。苦しみの根本的な原因は「死」

一 休禪師(親死 子死 孫死)——「順縁」

〈孫死 子死 親死〉——「逆縁」

○ “人間の死亡率は、百%”

「死から目をそむけるな」……釈迦の教え

第十三回 八つの苦しみ・八苦

「四苦八苦」といいます。前回に続いて、残りの四つの「苦」を考えます。「苦」から解放されるためには、「苦」そのものを見極めなければなりません。

- 再び「死」について
 - ・ 大田蜀山人〈今までは 人のことかと思うたに おれが死ぬとは こいつアたまらん〉
 - ・ 西行法師 〈願わくば 花の下にて 春死なん その如月の 望月のころ〉
- 「八苦」の内、「生老病死」に続く四つの苦しみ
 - 五 愛別離苦(あいべつりく)
 - 六 怨憎会苦(おんぞうえく)
 - ・ 「三従の教え」〈家にあつては父に従い 嫁しては夫に従い 夫死しては子に従う〉
 - ・ 〈こども叱るな来た道じゃ 年寄り嫌うな行く道じゃ〉
- 七 求不得苦(ぐふとつく)
- ・ 〈しあわせは いつも三月花の頃 お前十九でわしや二十歳 死なぬ子三人親孝行 使つて減らぬ金百両 死んでも命があるように〉(江戸時代の戯れ唄)
- 八 五蘊盛苦(ごうんじょうく)

第十四回 四つの真理・四諦

「無苦集滅道」 迷いの世界にはさまざまな苦しみがあります。その苦しみを断ち、悟りの世界へと導く方法を説いたものが、四つの真理「四諦(したい)」です。

- 「八苦」について(続き)
 - ・ 親鸞『教行信証』〈悲しきかな愚禿鸞 愛欲の広海に沈没して 名利の大山に迷惑す〉
く 都都逸(割つてみせたやわたしの心 割れば色気と慾ばかり)……「求不得苦」
 - ・ 蓮如『白骨の御文章(又は御文)』〈我や先 人や先 今日とも知らず 明日とも知らず〉……「生老病死」
 - ・ 釈迦は何故弟子達に結婚を許さなかったのか?……親鸞は何故結婚したのか?……「愛別離苦」
 - ・ 姑(下の句)世に鬼婆と 人のいうなり)嫁(上の句) (仏にも 勝る心を知らずして)……「怨憎会苦」
- 五(八の「苦」は、全部自分が原因)
- 「四諦」……「苦諦(くたい)」……人生は苦しみである
 - 「集諦(じつたい)」……何故なら、我々に欲望、煩惱があるから
 - 「滅諦(めつたい)」……その原因である欲望を無くさなければならぬ
 - 「道諦(どうたい)」……そのために何をするか……「八正道(はつしやうどう)」

第十五回

八つの正しい実践徳目・八正道

釈迦が悟りを開いて最初に説いた教えこそ「十二因縁」であり「四諦・八正道」でした。「八正道」は、すべての行為を悟りへと向けるための八種類の実践方法なのです。

○ 釈迦の「悟り」への道……ピッパラ(菩提樹)の下で悟りを開き、仏陀となる

鹿野苑 (現在のサルナート)で、五人の仲間にも最初の教えを説く……「初転法輪」しよてんぽうりん

○ 「八正道」

- 一 正見 (しょうけん)……正しく真実を見る
- 二 正思惟 (しょうしゆい)……正しく真理を考える
- 三 正語 (しょうご)……正しく真実のある言葉を伝える
- 四 正業 (しょうごう)……正しい行為を行う
- 五 正命 (しょうみょう)……正しい日常生活を送る
- 六 正精進 (しょうしやうじん)……悟りへの努力を正しく継続してゆく
- 七 正念 (しょうねん)……正しい教えのみを思つてそれを記憶しておく
- 八 正定 (しょうじやう)……正しい対象に精神を集中して迷いのない境地に安住する

↳「身口(語)意の三業」をすべて正しくする。

↳では、正しいか、正しくないかを、何で判断するのか？

第十六回

菩提薩埵・菩薩

「菩提薩埵」は「ボーディサットバ」。悟りを目指す者、仏になる為の努力をしている者を意味します。私たちは、「菩薩」を自分自身の問題として考えなければなりません。

○ 「菩提」(＝悟り)ということば……「菩提寺」「菩提を弔う」「菩提達磨」「菩提樹」

○ 「悟った者」「目覚めた者」 Ⅱ「正覚者」「仏陀」に対して、「悟りを目指す者」 Ⅱ「菩薩」

↳ 普通は、「三尊仏」の形で、「仏」の脇侍として二体の「菩薩」が侍る。

○ 「地藏菩薩」は、釈迦が仏になって以後、弥勒菩薩が仏として現れるまでの「無仏」の時代の救い主
普通は「六地藏」、「六道」のすべてで苦しむものを救う。一体だけの場合は「地獄」へ向かう姿

……宝珠と錫杖

○ 「菩薩」の三つの意味

- 一 釈迦が悟りを開く前の状態。二十九歳～三十五歳の六年間
 - 二 自分は仏になる資格があるが、まだ悟りを開かない者の為に待っている、途上人
 - 三 悟りを目指すすべての仏教徒。「比丘」「比丘尼」「信士」「信女」
- ・『三帰依文』〈自ら仏に帰依し奉る 自ら法に帰依し奉る 自ら僧に帰依し奉る〉

第十七回 恐れの対象

「心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛倒夢想」 恐れの対象は数多くありますが、すべては「死」につながっています。どうすれば恐れから解放されるのでしょうか。

○ 子どもの怖いもののベスト10（すべて自分の「死」につながる可能性があるもの）

〈火事、地震、犬、蛇、戦争、泥棒、ライオン、雷、嵐、強盗〉

○ なぜ恐れるのか……「罣礙」＝こだわり・とらわれ・はからい

良寛 〈盗人の とり残しけり 秋の月〉

〈焚くほどは 風の手てくる 落葉かな〉

○ 「罣礙」が「無」である＝こだわりを捨てる

・『葉隠』 〈武士道とは 死ぬことと見つけたり〉＝武士道とは生きることと見つけたり

○ 「生死一如（しようじいちによ）」の境地

・〈身を捨ててこそ 浮かぶ瀬もあれ〉……宮本武蔵のエピソード

第十八回 煩惱について

この講座も終盤にさしかかりました。まずこれまでの復習をし、続いて私たちに迷いをもたらす「煩惱」、すなわち人間のもっている欲望について、考えます。

○ （前回までの復習）

○ 「貪瞋痴（とんじんち）の三毒の煩惱」

一 貪欲（とんよく）

二 瞋恚（しんに）

三 愚痴（ぐち）……「モーハ」（＝馬鹿）から

・『法句経』 〈自らが愚かであるということに気がつくほど賢いことはない〉

○ そこからさまざまな煩惱が増えて、「百八つの煩惱」……教え方に定説はない

↳「数珠」は煩惱を消すための「聖句」を教える「計算機」

数珠の珠の数……百八↓五十四、三十六、二十七、十八

第十九回 一切の迷いから脱した境地・涅槃

「究竟涅槃」お釈迦様が横になってお亡くなりになった姿を「涅槃像」といいます。仏教のただ一つの目的は、「涅槃」の境地に入ること、つまり「仏」になることです。

○ 「涅槃」は「ニルバーナ」＝火をフツと吹き消した状態

＝欲望の火を吹き消した状態

○ 二つの解釈

「有余涅槃（うよねはん）」…釈迦が悟りを開いてから亡くなるまで（三十五歳～八十歳）

～まだ命のぬくもりが残っている状態

「無余涅槃（むよねはん）」…肉体が消えて、亡くなった状態

※「お盆」は、亡くなった人をお迎えする行事…迎え火・送り火

○ 涅槃の状態とは…浦島太郎の教訓

・〈花は紅 柳は緑〉

・いろは歌 〈色は匂へど散りぬるを 我が世誰ぞ常ならむ

有為の奥山今日越えて 浅き夢みじ 酔ひもせず〉…「寂滅為樂」の境地

第二十回 正しい悟りとは

「三世諸仏 依般若波羅蜜多故 得阿耨多羅三藐三菩提」 「阿耨多羅三藐三菩提」は、「涅槃」とほぼ同じ意味といえます。では、三世の諸仏とはどのような仏たちなのでしょう。

○ 「阿耨多羅三藐三菩提」はサンスクリット語（梵語）の音写語

「アヌッタラ」＝これ以上ない最高の、無上／「サムヤック」＝正しい／「サンボーディ」＝悟り

○ 「三世諸仏」

過去…「過去七仏」

現在…「釈迦牟尼仏」

未来…「弥勒菩薩」／未来仏信仰…「兜率天」で修行中。五十六億七千万年後に「仏」として現れる

～その間の「無仏の時代」に苦しむものを救うのが「地藏菩薩」

○ いつ悟りの状態になれるのか？…三つの考え方↓宗派が分かれる

～この世で仏になる（「即身成仏」）／永遠の未来に仏になる（「歴却成仏」）／次の世界で仏になる（「往生成仏」）

・仏教の出発点は、あくまでも、この世に生きている間に悟りの状態に到達することを目指す。

第二十一回 眞実のことば・眞言

最後の部分に度々出てくる「呪(咒)」ということば、これが「眞言」です。サンスクリット語の音写語で、文字通り「眞実のことば」「眞理を文字に表したものです」。

- 【練習】次の文章の中で、サンスクリット語の音写語はどれか？

①「うちの旦那さんは、毎晩、般若湯をきこしめすと、まるで羅漢さんのように顔がてかてかするかと思うと、ある時には阿修羅の如くに暴れまわつて、子どもたちまで泣き叫び出すので、まさに阿鼻叫喚の有様ですの。」

②「ッあばたまえくぼぐというけれど、あの女の子が、奈落からせり上がつて来ると、若者たちは馬鹿騒ぎをして、よくよく見れば仏像か菩薩像のような全く味気ない顔をしているじゃない。」

- 各宗派で唱えている「聖語」の大部分が音写語……「南無阿弥陀仏」「南無釈迦牟尼仏」など

↳「南無」は「ナモ・ナマハ」＝帰依（親鸞は「きみより帰命」と訳す）

※日本語の「五十音図（カタカナ・ひらがな）」も、サンスクリット語の音写字から

- 「眞言」は、祈り

第二十二回 羯帝 羯帝 波羅羯帝

「是大神呪 是大明呪 是无上呪 是无等等呪 能除一切苦 眞実不虚 故説般若波羅蜜多呪 即説呪曰 羯帝 羯帝 波羅羯帝 波羅僧羯帝 菩提僧莎訶 般若心経」『般若心経』
は最後に「眞言」を唱えて終わります。これこそ翻訳の出来ない、眞実のことばなのです。

- 「大神呪」 偉大なる眞言／「大明呪」 悟りの為の眞言

「無上呪」 最高の眞言／「無等等呪」 比ぶべきもない眞言

- 「羯帝 羯帝」 「ガテー ガテー」 〓 往き往きて

「波羅羯帝」 「パーラ ガテー」 〓 かなたに往きて

「波羅僧羯帝」 「パーラ サン ガテー」〓 かなたに完全に往きて

「菩提」 「ボーデイ」 〓 悟りよ

「僧莎訶」 「スパーハ」 〓 めでたし

- 「眞言」は、私たちの知恵の及ばない何か…… 奇跡 …… 信仰

- 眞実そのものを、口で表現することができる、と最初に説いた人が空海↓眞言宗

第二十三回 仏と衆生が結びあう・三密加持

「呪」＝「真言」を行ずる「密教」を日本で開いたのは、空海と最澄でした。この回は、密教における「三密」および「加持」について、考えます。

○ 空海の「真言宗」……「純密」（または「東密」）……純粋な密教

最澄の「天台宗」……「台密」………教義の一部に密教を含む

○ なぜ「密教」というのか？ 「秘密」とは？

・「大日如来」……本来は絶対にこの世に姿を現さない「法身(ほつしん)」を密教において形として

現した仏

○ 「三密」……「身語意の三業」

一 「身密」……身体で行う ・「印」を結ぶ

二 「語密」……口で行う ・「真言」を唱える

三 「意密」……心の中で、「大日如来」と一体になる

○ 「加持」……「加」は仏の側から手をさしのべる、「持」は信者の側から手をのばすく相呼応する

一 「除災・息災」／二 「招福」／三 「延命」／四 「調伏(じょうぶく)」

第二十四回 現代に生きる般若心経

『般若心経』は決して易しいお経ではありません。にもかかわらず人々に最も親しまれているのは何故なのでしょう。その教えを現代に生かすとは、どういうことなのでしょう。

※『般若心経』を用いない二つの流れ

浄土真宗と日蓮系の諸派。それは何故か？

○ 私の「般若心経体験」

○ 主語のない「おかげさまで」ということば

○ 死者儀礼や、現世利益だけではない仏教。真の心の安らぎ、充足感をこそ……

○ 「人として生を受くるは難く

やがて死すべきものの

いま 生命あるは ありがたし』 『法句経(ほつくぎょう)一八二』